Newspaper in Education

NIEニュース

エヌ・アイ・イー

Newspaper in Education

第93号
2019.3.15

◉特集・子供の成長につながるNIE▶1～3 ◉第９回「いっしょに読もう！新聞コンクール」表彰式▶4～5 ◉第４回NIE教育フォーラム／アドバイザー紹介▶6 ◉新聞の「今」――振り返り記事に見る「平成」／フラッシュニュース▶7 ◉〈NIEでいきいき〉〈NIEあれこれ〉▶8

©2019年 日本新聞協会

編集・発行 一社団法人 日本新聞協会 TEL：03-3591-4410（NIE担当） FAX：03-3592-6577 e-mail：nie@pressnet.or.jp
〒100-8543 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル [https://nie.jp] [https://www.facebook.com/Nie47]

特集

子供の成長につながるNIE

多忙を極める教育現場では、新聞を使うことにハードルの高さを感じている先生も多いだろう。今号の特集では、NIE初心者でも気軽に取り組める実践事例を各校種から寄せていただいた。先生自身が無理なく楽しくNIEを続けることで、児童生徒の資質・能力や学びに向かう力は確実に伸びていく。各事例とともに、NIEが子供たちの成長の一助となる可能性について考えたい。

日本新聞協会
NIEコーディネーター
関口 修司

時すでに、AI時代である。しかし、時代が教育に求めているのは「新聞」である。

子供は、成長できる授業を求めている

分かりやすい教科書は必要だが、全ての教材が分かりやすくなくてよい。子供はできるようになりたいと願っている。「ちょっと難しいこと」に、子供は意欲的に取り組むのである。

そこで、おすすめの教材が新聞。小・中学校段階では難しい漢字や語句も載るが、むしろそれがよい。小学校高学年になれば、見出しと写真などを手掛かりに意外なほど読み取る。

「新聞は子供には難しい」と思わず、まずは実践してほしい。

保護者は、子供の学ぶ力を育てる授業を求めている

NIEは新聞を読むことで終わるものではない。その先の子供の成長に目的がある。全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）では、「新聞を読む頻度と子供の学力に正の相関」があることが明らかだ。また、全国学力テストの全国平均正答率とNIEを実施している小学校15校のそれとを比較すると、後者が国語、算数ともに高いという結果（日本新聞協会調べ）も出ている。その根拠の一つに「読解力」の向上があると考える。

今求められている読解力には、文学的な文章だけでなく、多様な文章や資料の読み取りが必要なのである。

もちろん、おすすめの教材は新聞。記事には見出し、写真やグラフなどの資料、論説文や実用的な文章も掲載されている。新聞を読めば、おのずと求められている読解力が向上する。

保護者には新聞を活用する授業で、子供の成長を実感してほしい。

教師は、自らの指導力を高める授業を求めている

教師は多忙だ。日々の授業の準備や事務、保護者対応や部活の指導等で精一杯。授業に十分な時間を割くことは難しい現状がある。どのようにしてその時間を捻出すればよいのか。

それでも、おすすめの教材は新聞。教科書の補助教材として使えば、リアリティーがあり、タイムリーな内容で授業が活性化する。準備に一手間かかるが、二手間分の手のかからない子供に育つ。自ら学ぶ子供へと成長する。まずは、教師が新聞を読むことから。新聞を毎日読んでいると、徐々に教材研究が深まっていく。

NIEに努めることが、結果として教師の指導力を高めることにもなる。

時代は、社会とつながる授業を求めている

「社会に開かれた教育課程」を一言で言えば、学校教育と地域・社会の人・物・出来事をつなげること。学校の授業のねらいの先に現代的な諸課題の解決があることに気付かせたい。

やはり、おすすめの教材は新聞。新聞は学校教育と社会をつなぐ役割を果たす。授業の目標に関連した記事を導入に使えば、算数や理科であっても日常生活に結び付けて学ぶことができる。さらに、まとめや振り返りを通して他の記事とつなげれば、授業の学びを、よりわが事として捉えられる。社会参画意識の低下という問題、主権者教育という課題の解決にもつながる。

便利なメディアに注目が集まっても、時代は、まさに新聞を求めているのである。

遊び感覚でNIE 楽しみながら学力高める

新潟市立
上所小学校　教諭
NIE アドバイザー
牛膓　昌克

新聞を遊びや日常の活動に取り入れることにより、子供たちが自らの言葉の力を養ったり、考える力を高めたりすることができる。そして、自分の生活とつなげながら社会への関心をもち、自ら情報を得ようとする力が養われる。

しかし、新聞の日常化といっても小学校６年間の発達段階を考えた場合、子供たちにとって新聞は生活とは離れたものであるのが現実である。

たとえば新聞に親しむ遊びや日常活動として「新聞スクラップ」に取り組むことがある。定番の活動だが、新聞を丸ごと与えて「自分の興味のあることを見つけて新聞をスクラップし、自分の意見や感想を書く」という取り組みは、子供たちにとって実はかなりハードルが高い。そのため、新聞に親しむ遊びや日常活動においても段階を考慮しながら取り組む必要がある。

新潟県ＮＩＥ推進協議会は１月に、「学力を高める新聞遊び」を刊行した。その中では、新聞遊びを「基本の活動」「遊びの活動」「創作活動」の三つに整理し、体系化して示してある。

「基本の活動」とは「ことばの貯金箱」や「新聞読み聞かせ」といった、遊びの要素は少ないがじっくり取り組むことで活動の成果を量的な点から実感できる活動である。

「遊びの活動」とは「大きい字グランプリ」や「新聞しりとり」などの、遊びや競争の要素を生かしたゲーム性の高い活動である。

「創作活動」とは「意見の投稿」「わが町新聞」など、よりよいものを作るため、工夫を重ねながら取り組む活動である。

これらの遊びの体系を生かし、新聞遊びの段階を考えた場合、次のような取り組みが考えられる。

まず「の」の字を記事の中から制限時間内に探す活動を行う。文字への興味だけでなく、文の構成への理解を深めて、新聞を読むことに親しみをもたせる。

次に「見出しビンゴ」に挑戦する。見出しのもつ語感や視点の面白さなどの言葉の感覚を養うとともに、友達との視点の違いを交流することにより、コミュニケーション力を培う。さらには、新聞の記事内容への理解と関心も高めさせる。

そして、文章構成や記事内容への関心を高めたところで「新聞スクラップ」や「記事感想文」に取り組ませる。このように段階を踏むことで、文字や文章への興味から記事内容やコミュニケーションへの関心、そして考えたことを表現することへとつないでいくことができる。

「学力を高める新聞遊び」には28の「新聞遊び」と、新聞に親しむための環境づくりの方法が三つ収録されている。どのような資質能力が育成されるのか「思考スキル」の観点からも整理されている。それぞれの遊びを実践するだけでも楽しめるが、体系や思考スキルを意識して取り組むことで、子供にも教師にも楽しく力が付く新聞遊びとすることができると考える。書籍収載の事例は、３月中に協議会のホームページ（https://www.niigata-nippo.co.jp/nie-niigata/）でも紹介される予定だ。ぜひ一読していただきたい。

ワークシートで気軽にNIE 社会への関心高める効果も

高砂市立
松陽中学校　教諭
NIE アドバイザー
中野　順一

これまでの幾多のＮＩＥ実践を振り返ってみると、国語科では文章の読解力や作文力を付けるために社説やコラムを、社会科等においては授業内容に関する新聞記事を活用してきた。しかし、新聞に目を通し、記事選択から発問作成までを一人で行うとなると、時間がいくらあっても足りない。そこで、新聞各社が作成した「ワークシート」の活用を提案したい。時間短縮だけでなく、学習効果も期待できる。

①入手法　新聞協会のウェブサイト「教育に新聞を（ＮＩＥ）」の「学習用ワークシート」ページを開くと、全国紙・地方紙合わせて18社のワークシートが紹介されている。メールでの申し込み（登録）が必要な場合もあるが、直接ダウンロードして印刷・使用できる。授業での活用をイメージしながら空き時間に印刷しておくとよい。

②内容別の分類法　ワークシートを作成している新聞社にもよるが、使用に適した学年や教科・領域・単元・解答例が示されている。これらを参考にして、印刷したものをクリアファイル

に入れていく。例えば、社会科や道徳科などの教科ごとに、また福祉、人権、防災などの領域ごとに分類していく。その際、注意したいのは、同じ内容であれば、日付の新しいものに差し替えていくこと。この作業を日頃からやっておくと、いざ授業で使おうとするときに役立つ。

③授業での活用法　ワークシートを授業のどこで使うのか、見通しをもって授業計画を立てる。以下、実際に活用した新聞記事の具体例を挙げる。

（例）地理・歴史「北海道地方」

〈北海道新聞18年８月18日〉内閣府の世論調査で、アイヌ民族は先住民族と認識している人は七割超という記事

（例）道徳「公徳心」

〈読売新聞18年４月18日〉老人クラブ会員が、花見に行く仲間のために、電車の座席に紙を置いて席取りをしたという記事

（例）その他「時事問題への関心を高める」

〈神戸新聞18年10月21日〉生態系に悪影響を与えるプラスチック製のストローなどを紙製に切り替える動きが広がっているという記事

④ワークシート使用の効果　特に、地理や公民の教科書の内容や統計資料は、児童生徒が手にしたとき、すでに過去のものになっている。それに対し、新聞は内容やデータが最新のものである。そのような新聞のワークシートで児童生徒が学習習慣を身につけていけば、社会への関心だけでなく、読む力や書く力の育成にもつながる（ＮＩＥタイムでの活用も有効）。また、ワークシートで考えたことを新聞に投書したり、自分の意見を皆の前で発表する場を設定したりすれば、新聞を活用した学習への児童生徒のモチベーションも高まっていくであろう。

朝学習とＳＨＲを活用したＮＩＥ 短時間学習で主体性を育む

岩手県立盛岡第二高等学校　教諭
畠山　隆行

本校では、新聞記事を活用した「ミニプレゼンテーション」（通称「ミニプレ」）の活動に全校で取り組んでいる。「ミニプレ」とは、新聞を読み、関心のある記事を選んで要約し、それに対する意見をまとめ、ＳＨＲにおいて級友の前でスピーチをする一連の学習活動を指している。「ミニプレ」では、多様な言語活動を行うことで、読解力、思考力、表現力を身につけ、進路目標達成の一助とすることを目指している。

特に２学年では、朝学習（ＳＨＲ前の15分間の自習）においても記事を活用し、「ミニプレ」の活動を発展させている。

火～木曜日の朝学習では「生徒からの問題提起」として、生徒が選んだ記事をもとに学習している。発表担当の生徒は、日頃集めている記事の中から、特に関心の高い記事を一つ選ぶ。その記事を朝学習時に級友全員が読み、自分の意見や解決策を個々に記述する。その上で、ＳＨＲの冒頭にて発表担当の生徒がスピーチを行う。スピーチを受け、級友は所定の用紙に発表内容・態度等の評価を記入し、発表担当の生徒に渡す。発表担当の生徒は、級友の評価等をもとに、自分のスピーチを振り返り、自分の意見や解決策について再考した結果を記述し、担任に提出する。担任は、一言コメントを付して返却する。以上が「ミニプレ」と朝学習を連動させた取り組みである。なお「ミニプレ」の発表は、全生徒が年２回行っている。

月・金曜日は「ミニプレ」を実施しないかわりに、月曜日の朝学習では「教員からの問題提起」として、教員が選んだ「生徒に考えさせたい社会問題の記事」を読み、金曜日の朝学習では「大学入試で出題された記事」を読み、自分の意見や解決策を記述している。

これらの活動で特に意識しているのは、「自分なりの解決策」を考察させ、主体性を育むことである。当初は感想や意見を自由に記述させていたが、「すごいと思った」「○○してもらいたい」など、人ごとのような記述が多かった。そこで「私の解決策」を記述する欄を設け、常に考察するきっかけをつくっている。現時点では、実現困難な解決策や根拠の弱い解決策も見られる。しかし、日常の学習の中で「自分ならばどうする」という主体的な姿勢を常に意識する機会を設けることは、主権者を育む上で重要だと考える。短時間でも社会問題に目を向け、考察する学習サイクルをこまめに回していくことで、社会問題について主体的な意見を持つことが日常的で当たり前のことになる。やがては意見の質的向上も図ることができればと期待している。新学習指導要領が求める「主体的・対話的で深い学び」を展開する上でも、学習活動の工夫を続けていきたい。

第9回 いっしょに読もう！新聞コンクール表彰式

第９回「いっしょに読もう！新聞コンクール」の表彰式が２０１８年12月15日、横浜市のニュースパークで開かれ、小・中・高校（高専）各部門の最優秀賞の受賞者に賞状と盾が贈られた。受賞者はそれぞれが選んだ記事を執筆した記者と懇談し、記事に込められた思いに触れるとともに受賞の喜びを語った。また、優秀学校賞を代表して秋田県横手市立平鹿中学校の担当者を招き、贈賞した。

表彰式では、新聞協会ＮＩＥ委員会の町田智子委員長（朝日東京）が「学校単位での取り組みが着実に広がっている。このコンクールが、新学習指導要領のポイントの一つである『主体的・対話的で深い学び』を効果的に実現するものと、教育の場でも認識されているからではないか。新聞を通して子供たちが考えを深め、生きる力を育むための一助になっていればうれしく思う」とあいさつした。

最優秀賞受賞者と優秀学校賞代表者ら

表彰式にあたり、文部科学省初等中等教育局の大滝一登視学官から、「新聞は、日々の社会のさまざまな出来事を私たちに伝え、さまざまな立場の人たちによる優れた見方・考え方や表現の仕方を示してくれるメディアだ。新聞を通して視野を広げ、さまざまな事柄に対する見方・考え方を身につけ、自分の人生をすばらしいものにしてほしい」とのメッセージが寄せられた。

小原友行審査委員長（前日本ＮＩＥ学会長、福山大学教授）は、「受賞者のみなさんが選んだ記事のテーマはいずれも重いものだったが、興味を持って意見を伝え、相手の意見を踏まえ深く考えていた。重いテーマについて挑戦するには好奇心が必要で、意見を伝えるには勇気が必要だっただろう。これからの人生も、『好奇心』『勇気』『挑戦』の気持ちを忘れずに歩んでほしい」と語りかけた。

今回は47都道府県と海外から作品が寄せられ、応募数は計５万２１５５編（小学生６４９７編、中学生２万３６６８編、高校・高等専門学校生２万１９９０編）に達した。１次、２次、最終審査会を経て、小・中・高校生部門の最優秀賞を各１編、優秀賞を校種別に各10編、奨励賞を計１２０編選んだ。また、団体応募４２０校の中から、優秀学校賞を小・中・高校各５校の計15校、学校奨励賞を１５４校選んだ。

対話を通して得る気付き

小学生部門で最優秀賞を受賞した橋本隼人さん（福井市宝永小学校５年）は、劣悪な環境のもとで商品を大量生産するように子犬を産ませる「子犬工場」の問題を解説した記事を読み、動物の命について家族や親戚と話し合い、ペットを飼うことについて考えた。橋本さんは記事を読んだ感想について、「ペットショップで売られている犬や猫が狭いケージで育てられていることを知り、心が痛んだ」と話した。

笑顔で語り合う橋本くんと近藤記者

記事を執筆した福井新聞社の近藤洋平社会部記者は、子犬工場の問題に関する記事が学校の授業などで取り上げられていることを紹介。そのうえで「何が問題なのか、子供たちに考えてもらいたくて解説記事を書いた。橋本さんがこの問題について考え、発信してくれたことがうれしかった」と語った。

名古屋市立志段味中学校３年の道源琴乃さん（中学生部門・最優秀賞）は、妊娠した女性の劣悪な職場環境の問題を取り上げた記事を読み、父親との話し合いを通じて女性活躍推進の理念の現実を知り、考えを深めた。道源さんは社会が変わってほしいことについて、「人手不足だからといって、胎児を亡くした女性を働かせるのは問題だ。そのときは休めるようにしてほしい」と訴えた。

読売新聞東京本社の大広悠子社会保障部記者は今後の抱負について、「社会保障の問題には

大広記者と懇談する道源さん

正解がないこともある。読者に考えてもらえるように、これからも議論のきっかけとなるような記事を書いていきたい」と述べた。

小椋由貴さん（埼玉県立川越女子高等学校１年）は、行き過ぎた表現の広告に関する記事を読み、母親との話し合いを通じ、情報との関わり方やメディアリテラシーへと考えをめぐらせ、深い学びに結びつけた。小椋さんは新聞記事とインターネット上の情報の違いについて、「インターネットの情報は人々に届きやすいが、偏見があると思うこともある。新聞は昔からある媒体で、正しい情報が載っていて信頼性が高い」と話した。読売新聞東京本社の古屋祐治社会部記者は、記事を書くときに工夫していることを小椋さんから問われると、「難しい言葉をどう言い換えれば理解してもらえるかを意識して記事を書いている」と応じた。

記念盾を手にした小椋さんと古屋記者

このほか、表彰式には優秀賞を受賞した木村万智さん（東京都国分寺市立第五小学校２年）、優秀学校賞を受賞した岐阜県瑞浪市立釜戸中学校、埼玉県立川越女子高等学校の担当者らが出席した。

最優秀賞ならびに優秀賞受賞者の作品の全文など第９回の結果は、ＮＩＥサイト（https://nie.jp/month/contest_newspaper/2018/）に掲載している。

優秀学校賞報告

横手市立平鹿中学校「校長を喜ばせたい」生徒の思い詰まった受賞

第９回コンクールでは、新聞に触れる日常的な活動を含め、特に熱心に取り組んだ意欲的な学校に贈られる優秀学校賞に15校（小・中・高校各５校）が選ばれた。代表校として、秋田県横手市立平鹿中学校の渡會寛之教諭が表彰式に出席した。

渡會教諭は「ＮＩＥに熱心だった校長が今年度で退職することから、生徒たちが学校賞をプレゼントしたいと自主的に取り組んだ。校長に喜んでもらいたいという生徒の思いが詰まった受賞でうれしい」と喜びを語った。

渡會教諭と町田委員長

同校は、独自の切り抜き新聞コンテストを実施する。朝の会での１分間スピーチは、新聞記事を基に話すだけでなく、内容をシートに記入し、廊下に掲示している。校長も日々、読み比べ新聞「てつやが読む！」を作成し校長室前に掲示するなど、全校を挙げてＮＩＥに取り組んでいる。

今回のコンクールでは、中国の深圳日本人学校が海外からの応募校として初めて優秀学校賞に選ばれた。同校の篠原嶺教諭は、「日本にいたとき、私たちは中国にどのようなイメージを抱いていたのか。それはどのように形成され、どう向き合っていくのかを明らかにしようと取り組んだ。ほとんどの生徒が中国に対する認識の変化を実感しており、成果をあげられた。優秀学校賞という結果が得られてうれしい」とのコメントを寄せた。

優秀学校賞受賞校

（15校）

埼玉県	鴻巣市立赤見台第二小学校
東京都	国分寺市立第五小学校
愛知県	碧南市立西端小学校
福井県	越前町立糸生小学校
福岡県	柳川市立柳河小学校
秋田県	横手市立平鹿中学校
愛知県	豊田市立朝日丘中学校
岐阜県	瑞浪市立釜戸中学校
宮崎県	西米良村立西米良中学校
海外	深圳日本人学校
宮城県	宮城県気仙沼高等学校
埼玉県	埼玉県立川越女子高等学校
福岡県	西南女学院高等学校
佐賀県	佐賀県立小城高等学校
鹿児島県	鹿児島県立鹿児島南高等学校

第10回コンクール募集中

新聞協会は第10回「いっしょに読もう！新聞コンクール」の募集を始めました。対象は小・中・高校（高専）生です。18年９月10日から19年９月８日までの新聞から興味を持った記事を選び、家族や友達と話し合い、気付いた意見を応募用紙に記入してお送りください。締め切りは９月９日（必着）です。

応募要領はＮＩＥサイト（https://nie.jp/month/contest_newspaper/2019/）をご覧ください。

第４回ＮＩＥ教育フォーラム

社会とつながる――現代的な諸課題に対応する力を育む

新聞協会は2月9日、東京・内幸町のプレスセンターホールで第４回ＮＩＥ教育フォーラムを開催した。当日は教育関係者ら約１００人が参加。社会の多様化・グローバル化、成人年齢の引き下げなど、子供たちを取り巻く環境がめまぐるしく変化する中で、さらに重要性が高まっている現代的なテーマについて講演を聞いた。当日の様子はＮＩＥウェブサイト（https://nie.jp/forum/）に掲載中。

プログラム

講演Ⅰ「多様な性についての教育から多様性教育を考える」
薬師実芳氏（認定特定非営利活動法人ＲｅＢｉｔ代表理事）
講演Ⅱ「グローバル化する社会の中で『学びに向かう力』を育むＮＩＥ」
古家正暢氏（帝京大学経済学部地域経済学科教授）
講演Ⅲ「幼小中高を通した教科横断的な消費者教育の取り組み」
北村純一氏（姫路市教育委員会教育総務部管理指導主事）
報告「社会とつなぐＮＩＥタイム」
関口修司氏（日本新聞協会ＮＩＥコーディネーター）

現代社会の諸課題に向き合う若者を育成するために

産経新聞大阪本社
編集企画室企画担当部長
藤浦　淳

自ら取材・執筆した経験はないが、ＬＧＢＴについての記事をよく目にする昨今。講師で認定特定非営利活動法人ＲｅＢｉｔの薬師実芳代表理事の言葉には、あらためてどきりとした。「ＬＧＢＴの子供にとって困ることの第一は、教育現場ではそういう人はいないことになっている、ということです」。

ＮＩＥの出前授業として小・中・高校へ出かけたとき、そうした子供の存在を意識したことはない。笑いを取ろうとしてこの問題をちゃかしたりしなかったか？逆に避けがちなテーマではなかったか？「多様な性についての教育から多様性教育を考える」という講演は、常に意識しておきたい視点をわれわれに与えてくれた。

続く帝京大学の古家正暢教授の講演。水俣病を象徴するユージン・スミスの写真「Tomoko in her bath」。ご両親の「智子をもう休ませてあげたい」との願いで封印されたこの作品は、そもそも公開されてよかったのか？授業でなら使ってもよかったのか？なぜＯＫだと考えたのか？――生徒たちが問い続ける。単に公害を学ぶのではなく、教える側でさえ返答に窮するほどの問いかけや疑問を醸成する手法。記事やコラムを使った国際的・社会的問題の学びはすぐに結果は出ないけれど、やがて実を結ぶという報告「グローバル化する社会の中で『学びに向かう力』を育むＮＩＥ」は説得力にあふれていた。

児童の作品を提示しながら話す講師

兵庫県姫路市の消費者教育もユニークだった。単なる実務的教育ではなく、情報を消費者として受け取るためにＮＩＥを活用している、と言える手法なのだ。新聞記事の切り抜きを複数準備して紙面を再構成させて価値判断力を養うなど、オリジナリティー豊かに教育を実践する同市教委・北村純一管理指導主事の「幼小中高を通した教科横断的な消費者教育の取り組み」が広まれば、ＮＩＥの可能性も格段に広がる。

フォーラムを締めくくった新聞協会ＮＩＥコーディネーターの関口修司氏は、現代の諸課題に向き合うためのＮＩＥタイムの実践を提唱した。社会的な視野を持ち、自分なりの考えを持つ若者の育成に、新聞界はもっと関わる必要があるのではないだろうか。

当日の会場の様子

NIE アドバイザー紹介

❶ 学校名
❷ 担当教科
❸ NIE 実践歴
❹ 新聞を活用するうえでの工夫を一言

（敬称略）

●沖縄県
比嘉　美保（ひが・みほ）
❶沖縄県立桜野特別支援学校❷国語科（中学・高校）❸５年❹特別支援教育対象の児童生徒には、新聞の構造を理解させる学習の導入として、写真や見出しの一部を隠すキーワードクイズ、書く学習の導入として「はがき新聞」の作成を用いている。

新聞の「今」

改元を目前に控え、新聞各社が紙面で平成を振り返っている。これらの記事には、数十年にわたる取材で蓄積された情報がまとめられている。「一覧性」「記録性」という新聞の特徴が生かされた記事と言える。新聞の強みが集約されたこれらの記事を授業で活用することで、学びの深化も期待できる。振り返り記事に携わった新聞記者に記事に込めた思いを寄稿していただいた。

振り返り記事に見る「平成」
――時代を記録する新聞

朝日新聞
編集委員
市川　速水

元号とは、為政者が「時」すら支配しようとつくられた記号だが、いまやそんな実感を持つ人などいるだろうか。西暦と違って、あってもなくても困らないし、なんとなく……。あれ、今年、平成何年だっけ？

――という具合に元号は空気のような存在になった。天皇自身が事実上、退位を希望して国が動き出す、という異例の展開は、政治と皇室の関係、憲法との兼ね合いで論議を呼んだ。一方で、果たして平成という時代を論じ振り返る意味があるとすれば何か。記録を使命とし、一覧性を特徴とする新聞に何ができるか。それを私たちは2年前から考え始めた。

ベテラン記者と若手、男性と女性、各分野の専門記者が意見を交わした。記者の家族や読者の意見も聞いた。ところが、いくら話し合っても方針が定まらない。特に世代間の感覚の差が大きすぎる。戦争の傷痕や高度成長を経験した「激動の昭和」世代と、経済成長やインフレを知らない「平成世代」は、話がかみ合わない。

結局、未来にならないと「平成はこんな時代だったね」と言えないのだろう。そこで私たちは「平成は人それぞれが違うイメージを抱く時代。さて、あなたは」という意味を込めて「平成とは」というシリーズを手がけることにした。

1面～中面と続く時代論（2017年8月から随時）。平成のある時点を振り返り時代をあぶり出す「あの時」（同9月から月1回）、そして、記者自身が平成の仕事を振り返る「取材メモから」（18年8月から連日、夕刊中心）という「スリー・トラック」の手法をとった。デジタル版も写真や年表などビジュアル重視で展開した。

読者全体の傾向をつかむために、連載に先立って世論調査を行った。時代のイメージ、元号と生活のかかわり、改元時期はいつがいいか。平成の印象的な出来事など、おそらくメディアで初の本格的な試みだったのではないだろうか。

その結果浮き出たのは「明るい不安社会」という、矛盾するような平成のイメージだった。経済格差の広がりや非正規雇用の増加には不安が募る一方、全体的には「明るい時代」と感じる人が多かった。また、調査対象で最も若い18～29歳は「西暦の方が使い勝手がいいが、元号も捨てがたい」と、案外、元号が浸透していた。

平成ならではの特徴は三つに大別できると考えている。「低成長経済」「情報のグローバル化」、そして「少子高齢化による社会変革」だ。偶然にも平成元年（1989年）には中国で天安門事件が起き、東西ドイツの壁が崩壊した。その後も米同時多発テロ、リーマン・ショックと、どれも日本と無縁ではない。「世界の30年」を振り返ることにも意味がある。

いま教育の場にいる若者は、次の時代を通り越して、さらに次の時代も経験できるかもしれない。「平成はこんな時代だった」と振り返るときのために、私たちは今を記録し続けたい。

NIE フラッシュニュース

◇ＮＩＥ入門ガイドを今春公開

新聞協会はＮＩＥを始める若手教員ら向けに「これならできる！新聞活用――ＮＩＥ入門ガイド」を作成しています。同ガイドでは、ＮＩＥをこれから始めようとしている先生向けに新聞の読み方を解説するほか、児童生徒が新聞に親しみ、楽しみながらＮＩＥに取り組むことで身につく力について、ＮＩＥアドバイザーによる具体的な実践事例を挙げながら紹介しています。新聞記者による取材の仕方や記事の書き方解説も掲載しています。誌面データは3月中にＮＩＥサイト（https://nie.jp/nieguide/）に掲載します。ぜひご活用ください。

◇ＮＩＥ全国大会宇都宮大会のご案内　２０１９年８月１、２の両日、宇都宮市で第24回ＮＩＥ全国大会を開催します。大会概要はＮＩＥサイト（https://nie.jp/conference/2019/）をご覧ください。参加申し込みは5月から受け付ける予定です。ふるってご参加ください。

NIEでいきいき

本校は２０１８年度からＮＩＥ実践校の指定を受け、４学年（１０２人）を対象に実践を行っている。年度当初は、新聞を読んだことがある児童が少なく、全体の３割ほどだったこともあり、新聞に親しむことをねらいとした。また、新聞を授業で活用できる単元を年間カリキュラムから検討し、教科学習で無理なく実践ができるようにした。

国語科では、日常の学校生活を取り上げて新聞を作る単元があり、実際の紙面を見て見出しやレイアウトの工夫を学び活用する様子が見られた。また、社会科の学習で山形県内の市町村について調べたときは、新聞記事から最新の話題を見つけたり、写真を紹介したりしたことで、児童が新聞の良さを実感していた。

家庭学習でも新聞を読むことにした。児童にとって親しみやすい記事や、自分の考えを持ちやすい投書欄を「ＮＩＥプリント」として作成し、週末の宿題等で活用した。記事は、親子で読むことをねらいとして一般紙を使用したり、児童の自主学習のため子供向け新聞を使用したりした。プリントには必ず「自分はこの考えに賛成、反対、どちらとも言えない」という項目を入れ、自分の立場が明確になるように構成した。その考えを同じクラスの友達と比べたり、ときには他クラスの友達と比べたりして、感じ方が違うことを学ぶ上でも有効だった。

１年間の取り組みを経て「新聞にも書いていました」と授業で話す姿も見られるようになった。子供たちと新聞の距離は確実に縮まっていると、手応えを実感している。今後も児童が新聞の良さに気付く活動を行い、新聞に親しませていきたい。

鶴岡市立朝暘第一小学校

教諭　村山　聡美、黒田　輝

◎山形県鶴岡市／校長：小田　悟志／児童数：５５８人

◎特色：２０１８年度で創立１１１周年を迎えた。「たくましい子どもの育成」を学校教育目標として掲げ、藩校致道館教育の伝統を継承し教育活動を行っている。図書館活用教育に重点的に取り組み、全校児童が読書に親しんでいる。03年には「学校図書館大賞」を受賞。また県教委指定の探究型学習推進校として実践を重ねている。

夢中になって読み込んで

山形県の不思議発見！

事務局長から一言

鶴岡市立朝暘第一小学校は30年超に及ぶ読書推進活動の実績を誇り、活字媒体である新聞の活用教育に対し、山形県内でも特に親和性が高い学校といえる。実践指定校となるのは２０１８年度が初めてだが、読書推進と新聞活用がどんな相乗効果を見せるか、大いに期待している。

加えて４年生の実践に意欲的に取り組む、ともに20代の教諭２人は、地元小中高校で先輩後輩の間柄。実践校指定早々、昨夏は盛岡でのＮＩＥ全国大会にそろって参加。他県の教育・新聞関係者と触れ合い、大いに刺激を受けたという。フレッシュな２人が互いに切磋琢磨しながら取り組む実践が２年目にどう発展し花開くか、今から楽しみだ。（山形県ＮＩＥ推進協議会事務局長代理・笹原健一）

NIEあれこれ

福井県内の高校新聞部員が集まる「新聞大会」が毎年秋に開かれている。新聞部員が学校の枠を超えてグループになり、地元グルメ店や名所などを取材。即日でＡ３判の紙面を仕上げる◆取材先で根掘り葉掘り話を聞いて、急いで記事を書き、レイアウトを決める作業は本物の記者と同じ。指折り数えて見出しを付ける様子を見ていると、まるで〝同志〟が作業しているような気持ちになる◆ただ、大会への参加校は年々減少している。昨年は人数こそ29人と多かったもののわずか３校。約20年前は10校近くあり３分の１程度だ。若者の新聞離れが叫ばれているが、近年新聞部も休止が相次いでいる◆福井県は小中のＮＩＥ活動は熱心だが高校への接続が課題とされている。今秋の大会は福井新聞社で開かれる。ＮＩＥのさらなる推進へ高校新聞部を盛り上げる契機にしたい。

（福井新聞社・薮内弘昌）